
 学 会 記 事

第223回新潟外科集談会

日 時 昭和61年11月29日(土)

午後12時30分

会 場 有壬記念館

一 般 演 題

1) 末梢肝管型肝内結石症の一手術例

坪野 俊広・斉藤 六温 (刈羽郡総合病院)
関矢 忠愛・植木 光衛 (外科)吉田 奎介 (新潟大学第一)
(外科)

肝内胆管病変が原因と考えられる原発性肝内結石症の中で、3次分枝以上の区域内胆管に結石が存在する末梢肝管型肝内結石症の肝切除例を経験しましたので報告します。

症例は48歳の女性で、子供の頃から時に上腹部痛がありました。今回、偶然の超音波検査により肝内結石を指摘されました。

総合画像診断により、S₂、S₃、S₅に結石を有する末梢肝管型肝内結石症と診断し、胆嚢摘除、外側区域切除前下亜区域切除、Tチューブドレナージ施行しました。

術後経過は良好で、遺残結石は認められておりません。

末梢肝管型でも両葉に多発する場合は、治療に難渋する場合があります。肝予備力の十分な場合が多いので、亜区域切除等を駆使すれば根治可能な症例も多いと考えます。

また、末梢肝管型では、無症状のまま剖検時に発見されるものもあり、その手術適応につき研究してゆくことが必要と思われる。

2) 当院における胆石手術例の検討

—胆嚢癌症例を中心に—

大坂 道敏・大矢 明 (亀田第一病院)
(外科)

小浜 寿彦 (同 内科)

昭和57年1月より昭和61年6月までの4年6ヶ月間に当院で手術した胆石症例および胆道疾患症例は、120例であった。

男女比は、3:7と圧倒的に女性が多く、年齢をみると70才以上が43例で、このうち80才以上が11例と高齢者

が多く、平均年齢でも61才であった。総胆管結石症例は21例と比較的多かったが、結石の種類はコレステリン系結石が半数以上であった。

高齢者が多いためか癌症例が多く、10例にみられた。このうち、術前より診断のついた4例の症例は全て切除不能であり、再手術を要した2例を除いた4例は全て早期胆嚢癌症例であった。

3) 経十二指腸乳頭形成術の経験

藤野 正義 (佐渡総合病院)
(外科)

昭和44年から56年に50例の経十二指腸乳頭形成術を行い6年から17年後の遠隔成績を調べた。

術前からの胆管炎による手術死亡や肝内結石例での再手術もあったが、近年は回避されている。

術後遠隔時の胆管炎・膵炎など問題のある例は4%で特に多くはなかった。

経十二指腸乳頭形成術は胆管空腸吻合や胆管十二指腸端側吻合より容易で、leak等合併症が少く、T-tube留置例より術後の入浴・退院が早く、再手術が必要となる例が少い等、上部胆管狭窄や肝内結石例を適応外とすれば、有用な術式と考えられました。

4) 急性胆道炎の治療方針

—とくに DIC 合併例に対して—

村山 裕一・清水 春夫 (村上病院外科)

過去2年8ヶ月に経験した196例の良性胆道疾患症例中、急性胆道炎として治療を行なった37例(無石胆嚢炎6例、胆嚢結石症19例、胆管結石症6例、胆嚢胆管結石症6例)を対象として緊急経皮的胆道(胆嚢)ドレナージ術の有用性および胆道炎の治療方針につき検討した。緊急ドレナージを行なった12例では他の25例に比べ、ショックや精神症状を合併した重症例が有意に多く見られた。死亡は37例中1例(2.7%)のみであった。一方、血小板10万未満、FDP 10 μ g/ml以上をDICまたはDIC準備状態と定義すると、DIC合併例は6例あり、これらの症例ではビリルビン、BUN、クレアチニンの有意の上昇を認め、MOFへの移行が危惧された。この内5例に緊急ドレナージを行ない、4例を救命し得たことより、高齢者の重症急性胆道炎症例、とくにDIC合併症例に対しては積極的に緊急ドレナージを行なうべきものと思われた。